

『新 脱亜論』

渡辺利夫 著



文春新書
935円(税込)

のつけからなんだが、本書の終わり近くにこんなエピソードが挿入されている。興味深いことと思われるので、何をさしおいても引用させてもらいたい。

宮沢喜一内閣の時だという。アジア太平洋問題に関する首相の私的懇談会が設置され、現在拓殖大学学長を務める著者もその委員の一人に指名された。その第一回の懇談会のゲストスピーカーに梅棹忠夫氏が招かれた。文化人類学者の梅棹氏には名

著『文明の生態史観』(中公文庫)があるが、その人がこう切り出した。

「日本が大陸アジアと付き合うとろくなことはない、というのが私の今日の話の結論です」

委員全員があっけにとられるということがあったそうだ。梅棹氏といえば、どちらかといえばリベラルっぽいグローバルな「人類人主義者」を自認する学者でもある。しかしこれが、虫の目ならぬ鳥の目で俯瞰した極東アジアの冷厳な政治生態史観

評者：石井英夫

いしい ひでお

1933年生まれ。55年産経新聞社入社後、札幌支局などを経て、産経新聞論説委員。人気コラム「産経抄」の執筆を30年以上にわたって担当した。日本記者クラブ賞、菊池寛賞受賞。著書に「コラムばか一代 産経抄の35年」(産経新聞社)など多数。

だったのである。

さて、いま東アジアは「坂の上の雲」と同じ舞台設定に立ち戻っている。

日清・日露の両戦争が戦われた明治のあの頃に、先祖返りしたかのよう

に酷似している、と著者はいうのだ。

北朝鮮はミサイル搭載可能な核で恫喝し、韓国は親米・反米・反日を制度化し、中国もまた愛国という名の侮日政策を推進しつつある。それが極東アジアの地政学だろう。なればこそ、「坂の上の雲」の明治日本人のリアリズムに学ぶべきだ。近現代史のかずかずの教訓がそこにある、と著者は説いている。

日清関係でいえば、陸奥宗光は華夷秩序の破壊に挑戦し、欧米列強に伍してまさに帝国主義の外交を展開した。外交は友好や善隣でなく、国益の確保そのもののためである。陸

奥の深い熟慮と迅速な判断、加うるに豪胆さが日本のために生きた。

日露関係でいえば、小村寿太郎はイギリスと同盟を結んで背後をかため、対露戦に全力を傾注した。当時の軍事力を比較すれば、陸軍は日本十六万人に対し、ロシア二百万。海軍は総トン数で日本二十六万トンに対し、ロシア八十六万トンである。まさに日英同盟なくして日露戦争の勝利はなかった。

日清・日露の戦争では、日本は政治指導者たちの戦略と機略、そして日本人の勇猛と努力によって国難の荒波を乗り切ったのだった。

世界は不条理に満ち満ちている。外交とは武器を用いないでする戦争以外の何物でもない。国際権力政治とはそういうものだと言き直るほかはないのだ。前記の『梅棹生態史観』

に照らしても、いま日本の知識人や政治家が志向する「東アジア共同体」構想なんぞ愚の骨頂であることは明らかだろう。

東アジアの風雲の中で、日本の外交はどうなっているのか。

「お友達の嫌がることをあなたはしますか。しないでしょう。国と国との関係も同じ。相手の嫌がることをする必要はない」

これは昨年の九月、自民党総裁選出馬にあたって記者会見した福田康夫氏の外交観である。これが「お友達外交」をすすめる日本の政治指導者のていたらくなのだ。

著者は「明治の先人のしたたかさ」を、日本の若者にどうしても伝えておきたい」と念じて書いたという。憂国と痛憤の気持ちがあひしひしと感じられる。渾身の一書だろう。